



## 佐藤嘉倫教授の業績と学風

浜田 宏

本学大学院文学研究科、人間科学専攻行動科学専攻分野の佐藤嘉倫教授は二〇二三年（令和五年）三月末日をもって退職される。佐藤嘉倫先生はご専門の社会学で大きな足跡を残され、斯界に多大な貢献を果たした。また副研究科長および教育研究評議会評議員を務めになり、文学研究科の運営に貢献された。ここに先生の長年の本学への貢献を振り返り、ご経歴と研究教育活動を紹介させていただく。

先生は一九五七年十月に東京でお生まれになり、一九七七年に東京大学理科Ⅰ類に入学した。理科Ⅰ類は、いわゆる理系科目を学ぶ教養学部前期課程であり、大学入学当初は数学の研究を志しておられたが、次第に人間行動や社会構造への関心が高まり、自然科学から人文社会科学へと研究関心を移していった。文学部に進学した後、富永健一先生の指導を受け、社会

変動論や社会計画論を中心に社会学を学んだ。学外では当時東京工業大学に在籍しておられた今田高俊先生から数理社会学の指導を受けた。一九八〇年代はパーソンをはじめとする社会システム論が流行した時期であり、構造機能主義を通じて数理社会学と巡り合ったことは、もともと数学が好きだった先生にとって、必然的な出会いだったのかもしれない。

一九八二年四月東京大学大学院社会学研究科社会学専攻に入学、一九八七年に同博士課程を単位取得退学された。同年四月横浜市立大学商学部で講師として着任、翌年助教授に昇任され、一九九二年四月東北大学文学部に助教授として着任された。東北大学に着任後すぐ新渡戸フェローシップの支援を得て一九九二年七月から一九九四年七月までシカゴ大学社会学部に客員研究員として滞在し、ジェームス・コールマン教

授のもとで、社会変動論と数理社会学の研究に専念された。シカゴ大で学んだ合理的選択理論、ミクロンマクロリンクモデル、ゲーム理論は、その後の先生の研究活動において中心的な方法論となる。一九九七年二月に博士（文学）を東北大学で取得し、二〇〇二年十月東北大学大学院文学研究科教授に昇任された。二〇〇八年八月から二〇一一年三月まで、および二〇一一年十月から二〇一四年三月までの期間、ディステイングイッシュトプロフェッサーに任命された。これは大学内の教育、研究、社会貢献において先導的な役割を担う優秀な教授のみが任命されるポストである。

二〇一六年四月より歴史科学専攻長を、二〇一七年四月より文学研究科副研究科長および文学部副学部長を併任した。また、コーネル大学、ドイツZUMA、インドネシア大学、フランス国立社会科学高等研究院、統計数理研究所などさまざまな国内外の機関で客員研究員と客員教授を併任された。そして二〇二〇年四月からは、クロスアポイントメント制度により京都先端科学大学人文学部心理学科教授・人文学部長を併任されている。

学外に目を転じると、先生は国内外の学会で数多くの委員・理事・会長を務め社会学の国際化と発展に貢

献された。日本社会学会（理事、国際化戦略特別委員会委員、将来計画特別委員、国際交流委員）、数理社会学会（編集理事、渉外理事、論文賞選考委員長）、行動計量学会（大会企画委員）、東北社会学会（理事）、International Sociological Association（合理的選択部会理事、理事）、American Sociological Association（論文賞選考委員、合理性と社会部会・部会長）で委員と理事を歴任し、数理社会学会（二〇〇五年四月～二〇〇七年三月）と東北社会学会（二〇一五年七月～二〇一七年六月）では会長を務めた。さらに二〇〇六年から日本学術会議の連携会員、二〇一七年から日本学術会議会員となり、社会学にとまらず、日本の学術活動全般の発展にも貢献された。

先生の研究活動は社会学の中でも特に数理社会学・計量社会学とよばれる分野に関わり、その関心は多岐にわたるが、研究内容を時系列順に分類すると、まず第一期として社会変動論の数理的解析、第二期として信頼の生成プロセスに関する数理社会学的研究、そして第三期に社会構造と信頼をつなぐ理論概念としての社会関係資本に関する研究、の三つに分けることができる。もちろんこの三つの研究領域はそれぞれが密接にリンクしている。

先生が研究者キャリアの初期に博士学位論文で取り

組んだ問題は、合理的な計画主体がなぜしばしば計画の実現に失敗するのか?という問いだった(この学位論文は加筆を経て一九九八年『意図的社会変動の理論——合理的選択理論による分析』東京大学出版会として刊行される)。先生は厚生省が実施した高齢者に対する医療費無料化対策(一九七三年の老人医療費支給制度)に着目し、この制度が失敗した理由を、不完備情報展開型ゲームを用いて鮮やかに説明した。「計画主体(行為者)が不合理だから失敗したのではなく、不確実性のもとで合理的であるが故に失敗したのだ」という逆説的なロジックをゲーム理論を用いて厳密に定式化し、成功と失敗の二種類の帰結(完全ベイズ均衡)が生じる条件を特定したところに、この研究のオリジナリティがあり、そのスタイルはコールマン教授から受け継いだ数理社会学の王道といえる。

次に先生は信頼関係の形成メカニズムの解明に取り組み、数理モデル及びシミュレーションによる理論的な定式化で大きな実績を残した。Trust, assurance, and inequality: A rational choice model of mutual trust, *Journal of Mathematical Sociology* 26(1-2): 1-16, 2002。では、信頼に関する社会心理学の知見の説明を目指し、相互信頼のゲーム理論モデルを構築した。信頼者と被信頼者の関係が対称的な状況と、行為者間で資源保有

量に差がある状況下でモデルを分析した結果、興味深いインプリケーションの導出に成功した。具体的には、取引コストと機会コストの比率が行為者の信頼性に影響を与えること、他者を信頼できる行為者はより高いリターンを求めて自分のグループを離れやすいこと、資源の豊かな行為者は貧しい行為者よりも相手を信頼しやすいこと、などである。このとき先生はゲーム論の共有知識の仮定が、プレイヤー数の多い現実の社会ではしばしば成立しない問題に気づき、より弱い仮定で計算可能なエージェント・ベースト・シミュレーションに関心を持つようになる。

そのような方法論的関心のもとで、コーネル大学のマイケル・メイシー教授と進めた共同研究(Trust, cooperation, and market formation in the US and Japan, *Proceedings of The National Academy of Sciences of The United States of America* 99(suppl. 3): 7214-7220)では、アメリカ人が日本人と比較して見知らぬ人を信頼する傾向が強いという調査や実験データに基づく知見から「なぜ、集団主義的な文化では信頼が低くなるのか?」という問題の解明に取り組んだ。この論文ではゲーム理論ではなくエージェント・ベースト・シミュレーションを利用し、より現実的な条件下でモデルを分析した。その結果、社会内での流動性が適度な水準

にある場合にエージェンツの一般的信頼感が高まるが、流動性が低すぎると見知らぬ他者との接触機会が減少して一般的信頼が涵養されず、流動性が高すぎる場合にも、信頼関係が希薄になり一般的信頼が機能しないことを明らかにした。

こうして信頼の理論的基礎の定式化に成功した先生は、社会構造と信頼をつなぐ理論概念としての社会関係資本の研究を展開してゆく。その展開を紹介する前に、先生による日本社会の階層構造に関する実証研究と、その母体となった研究プロジェクトについても触れておこう。先生は研究者個人としての業績も豊富だが、分野全体の発展のための研究プロジェクトの推進にも力を尽くしてきた。文部科学省科学研究費補助金特別推進研究「現代日本階層システムの構造と変動に関する総合的研究」の研究代表者として、先生は大規模社会調査「二〇〇五年社会階層と社会移動全国調査（SSM調査）」の計画と実施を指揮した。この調査は一九五五年から十年ごとに実施される社会学者主導の全国調査で、社会階層の構造や世代内・世代間の職業移動プロセスの解明を目的としている。先生が代表を務めた二〇〇五年調査は、バブル経済崩壊後の階層構造の流動化、すなわち非正規雇用者の増加や終身雇用制の弱体化などの日本社会にとって極めて重要な変化

をとらえた貴重なデータを提供し、このデータに基づく優れた階層研究を数多く生み出した（『現代の階層社会1——格差と多様性』東京大学出版会）。また文部科学省二十一世紀COEプログラムに採択された「社会階層と不平等研究教育拠点の形成（二〇〇三年四月～二〇〇七年三月）」では社会階層と不平等の研究教育拠点を形成するために、「構造と変動」「東アジア」「公正」「マイノリティ」の4つの部門を立ち上げ、拠点のサブリーダー・事業推進担当を務めた。このプログラムの成功は高く評価され、その発展的継続として「社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開（二〇〇八年四月～二〇一三年三月）」がグローバルCOEプログラム（GCOE）に採択された。その代表者として先生は拠点のリーダーを務め、格差の理論的問題と実証的問題の融合的解決に取り組んだ。SSM調査からGCOEに至る研究において、先生の目的は社会制度の違いがもたらす不平等を明らかにすることだった。特に先生が注目した変化は労働市場における正規・非正規の区分の拡大であり、これを企業規模に基づく既存の二重構造（大企業部門と中小企業部門）に追加される新たな二重性として捉え、正規雇用と非正規雇用がライフコースを通じて特徴的なキャリアパスを形成し、後者が生涯を通じて雇用の不安定さや低所得な

どのディスプレイバンテージを被ることを実証的に示した。日本における不平等研究は、経済学が主として所得格差に、社会学が主として世代間移動に研究関心が集中していたが、制度の変化がもたらす不平等への影響という視点を導入した点に独創性があった。

階層研究における先生の活躍と後進の指導は、それまで記述的な計量分析に偏りのあった分野に、より説明的な理論志向の研究潮流を生み出した。数多くの研究者を束ねる大規模プロジェクトのリーダーを務めることは、さぞかし苦勞が多かったことと推察されるが、先生の意思決定は常に迅速かつ的確で、頼もしい姿だけがメンバーの目に焼きついている。SSMとGCOEリーダー時代の佐藤先生の超人的な働きぶり、プロジェクトに参加していたメンバー間では伝説となっており、あまりのタフさに「佐藤先生影武者存在説」が囁かれ、先生が実は二人いると噂になったほどである。

先生はその後社会関係資本の理論と実証に取り組み、不平等を生成する原理としてのソーシャル・キャピタルの研究に着手する(『ソーシャル・キャピタルと社会学における研究のフロンティア』ミネルヴァ書房)。先生は従来のソーシャル・キャピタルに関する研究が、その正機能(たとえば自治会や消防団な

どの地域組織が防災・減災・復興に貢献すること)や逆機能(結束型社会関係資本は新しい関係の構築を阻害すること)の記述に腐心するあまり、肝心の生成過程を分析してこなかったことに注目し、その理由を考察した。先生の論考によれば生成過程の分析が難しい理由は、個人の持つネットワークがソーシャル・キャピタルに変換されるかどうかは、ネットワークを構成する個人の効用関数に依存するからである。例えば自分が役員になるコストと自治会から得られる便益を勘案し、コストが便益を上回らなければ誰も役員にならうとしないように、資本への変換に正の効用が付随しなければネットワークそのものは資本を自動的に生成成しない。先生はソーシャル・キャピタルの生成過程を合理的選択理論に帰着させ、信頼のシミュレーション研究で見出した知見がソーシャル・キャピタル生成の鍵となることを見抜いた。その鍵とは利他的利己主義と互酬性であり、それを確保するメカニズムが、

人々の集団間移動と多重所属である。ある現象の機能を記述することはたやすいが、現象の生成を説明することは難しい。しかしその困難に挑むことに価値があることを常に先生は説いてこられた。ここに先生の理論家として嗅覚の鋭さが表れている。

先生は東北大学をご退職後、京都先端科学大学で引

き続き研究教育を継続される。社会関係資本を研究する社会科学者は多いが、「見知らぬ他者を信頼に足るかどうかを見極めたいという信頼することで、社会関係資本が増加する」という研究成果を先生ほど自身のキャリアと人生において活用している人はいないように見える。先生の指導を受けた大学院生の多くが、現在優れた研究者として活躍している事実も、そのことを傍証している。

もともと先生が社会関係資本の恩恵に浴しているのは、先生が冷徹な合理主義者だからではない。先生が誰からも好かれ、誰からも信頼されるのは、先生が常に他者を尊重しているからである。その態度は相手が高名な研究者であっても、学生であっても変わりがない。他者への信頼と尊重は相手からの見返りを期待した合理的行動ではなく、先生に備わったフェアネス精神の自然な発露である。これからも先生が皆から愛され続け、益々ご活躍されることを研究室一同、願っている。